

障害のある人を対象としたオープン・カレッジの開催

— 発達障害のある高校生の進路選択支援・知的障害のある人への学習機会の提供 —

薬師寺明子 ・ 河本茂美¹ ・ 柴崎晃司² ・ 岩田直也² ・ 濱口美穂²

I. はじめに

大学の施設、教員・学生等の大学資源を活用し、学習の機会の少ない障害者を大学に招き、生涯学習を支援するオープン・カレッジという取り組みがある¹⁾。オープン・カレッジは1995年、東京学芸大学において、大学教員や付属養護学校(現在は特別支援学校)、多摩地域の養護学校教員の教員などで構成される「養護学校進路指導研究会」が、特別支援学校を卒業した知的障害を対象に大学公開講座「自分を知り、社会を学ぶ」を開講したのが始まりである¹⁾。1998年に大阪府立大学安藤研究室⁵⁾がオープン・カレッジとして活動を始め、活動に賛同した大学関係者を中心に広がりを見せ、1999年度には武庫川女子大学、2000年度には桃山学院大学が開講した。その後、宮城大、徳島大等でも開講し全国的な広がりを見せた¹⁾。

オープン・カレッジには三つの理念①知的障害者の人権(教育を受ける権利)の保障、②知的障害者の変化(発達)の可能性の保障、③地域社会に対する大学の貢献がある。オープン・カレッジは知的障害のある人に、ただ学ぶ場を提供するだけではなく、「教育権」や「発達保障」実践を通して実現しようとする取り組みである。

著者はこれまで、おかやま発達障害者支援センターと協働して行ってきた「オープン・カレッジ in 美作大学」とゼミ学生が主体となり開催してきた「オープン・カレッジ“きんちやい みまさかれっじ”」を開催してきた。本報告では、2017年度に実践したオープン・カレッジについて報告する。

II. 発達障害のある高校生の進路選択支援

オープン・カレッジ in 美作大学

近年、発達障害のある人への支援について多くの課題があり、社会的にも注目されている。特に知的障害を伴わない発達障害のある人は、利用できる福祉サービス等が少なく、高等学校、専門学校、大学等を卒業後は就労という進路が中心になってくる。そのため、今後求められる支援体制の1つとして、「就労準備に取り組む場」が求められている。

おかやま発達障害者支援センター(以下;支援センター)においても、普通高校等に在籍する生徒からの就労相談が、多く寄せられている。しかし、職場体験の機会が少なく、就労イメージを持ちにくい現状があり、就労準備のための資源が求められている。この現状の課題解決にむけ、2013年度より美作大学と支援センターが協働し、発達障害のある人を対象とした「オープン・カレッジ in 美作大学」を企画・実施している。なお、2017年度はこれまで学内で実施してきた「オープン・カレッジ in 美作大学」と高等学校の授業2時限で実施できるように「出前講座～働くことを知る・学ぶ～」として再構成したものを、ニーズのあった地域の高等学校で実施した。

1. 方法

1) 企画: 筆者及び支援センタースタッフ

2) 実践者

全体の運営: 筆者及び支援センタースタッフ

参加者へのサポーター及びスタッフ: 薬師寺研究室ゼミ学生(3年生・4年生)

1 おかやま発達障害者支援センター 所長

2 おかやま発達障害者支援センター 県北支所

講義の際の講師: 看護師資格を持つ大学教員、キャリアコンサルタント資格を持つ大学職員

模擬作業: 大学附属図書館職員

③対象: 普通高校に通う発達障害のある人で、就労にむけた準備に意欲があり、学校に安定して通うことができている状態にある3名(定員8名)。参加にあたっては、所属校の担任、特別支援教育コーディネーター、相談室の教諭が、参加者・保護者と相談の上、申し込む形式をとった。また、「参加者・保護者にプログラム概要の説明」、「保護者や所属校の担任等から参加者の配慮点の聞き取り」、「参加者同士のグルーピングの検討」、「参加者と学生サポーターのマッチング」等を目的に、支援センターが所属校への事前訪問を実施した。

④倫理的配慮: プログラムの評価研究に関する参加者への同意および個人情報の記載等については、事前訪問時に参加者に説明を行い、書面にて同意を得た。

2. 実践内容

今年度は開催予定を2回としていたが、各高等学校と本学のスケジュールが合わず、1回の開催と高校に出向いて行う出前講座を1回行った。

1) オープン・カレッジ in 美作大学実践内容

①第1クール 実施日: 6月11日(土)18日(土)

参加者: 8名

2) プログラム実施前: 支援センターが参加者の所属校に事前訪問を行い、得られた配慮点等の情報をもとに運営スタッフ全員で企画会議にて共有した。

3) プログラム期間: 1クール2日間とし、土曜日を利用し、1回5時間程度であった(表1)。

表1 当日のスケジュール

1日目	2日目
オリエンテーション(15分)	
講義Ⅰ(45分) (アンケート記入含む)	講義Ⅱ(45分) (アンケート記入含む)
休憩(10分)	休憩(10分)
マナー講座Ⅰ(20分) (アンケート記入含む)	マナー講座Ⅱ(20分) (アンケート記入含む)
グループワーク(30分) (アンケート記入含む)	グループワーク(30分) (アンケート記入含む)
昼休憩(60分)	昼休憩(60分)
模擬作業Ⅰ(90分) (事務作業)	模擬作業Ⅱ(90分) (図書館作業)
グループワーク(30分) (アンケート記入含む)	グループワーク(30分) (アンケート記入含む)
	全体の振り返り(15分) (アンケート記入含む) 修了証書授与

4) プログラム内容: 「働くことを知る・学ぶ」をテーマとして、①講義、②マナー講座、③模擬作業を実施した(図1)。それぞれの内容を振り返るため、実施直後にアンケート記入し、それらをもとにグループワークを実施した。プログラム終了後は、

当日参加したスタッフで事後ミーティングを実施した。
5) 参加者及び支援者の動き：参加者は3名だったので、グループワークと模擬作業はグループ分けをせず実施した。支援者として、学生が個別に「学生サポーター」として、2日間のプログラム全体を通して参加者が困った時や分からない時のサポート役を担った。学生スタッフは実施中の準備や片づけ、模擬作業の際の見守り等を行った。

図1 プログラムの内容と役割分担

内容と役割分担			
講義	<table border="1"> <tr> <td> 講義Ⅰ 「働く上で大切なコミュニケーション」 (キャリアコンサルタント資格を持つ 大学職員が担当) ①学校と職場の違い ②挨拶について ③報告・連絡・相談 (ホウレンソウ)について </td> <td> 講義Ⅱ 「基本的生活習慣の大切さ」 (看護師資格を持つ大学教員が担当) ①学校と職場の違い ②朝ご飯を食べること ③睡眠時間の確保 ④朝の準備や段取り ⑤身だしなみを整える </td> </tr> </table>	講義Ⅰ 「働く上で大切なコミュニケーション」 (キャリアコンサルタント資格を持つ 大学職員が担当) ①学校と職場の違い ②挨拶について ③報告・連絡・相談 (ホウレンソウ)について	講義Ⅱ 「基本的生活習慣の大切さ」 (看護師資格を持つ大学教員が担当) ①学校と職場の違い ②朝ご飯を食べること ③睡眠時間の確保 ④朝の準備や段取り ⑤身だしなみを整える
講義Ⅰ 「働く上で大切なコミュニケーション」 (キャリアコンサルタント資格を持つ 大学職員が担当) ①学校と職場の違い ②挨拶について ③報告・連絡・相談 (ホウレンソウ)について	講義Ⅱ 「基本的生活習慣の大切さ」 (看護師資格を持つ大学教員が担当) ①学校と職場の違い ②朝ご飯を食べること ③睡眠時間の確保 ④朝の準備や段取り ⑤身だしなみを整える		
マナー講座	<table border="1"> <tr> <td> マナー講座Ⅰ (社会福祉学科の学生が担当) ①挨拶と報告をする時は ②作業中の指示 ③質問をするタイミング </td> <td> マナー講座Ⅱ (社会福祉学科の学生が担当) ④寝る前の過ごし方 ⑤出勤の際に ⑥身だしなみを整える </td> </tr> </table>	マナー講座Ⅰ (社会福祉学科の学生が担当) ①挨拶と報告をする時は ②作業中の指示 ③質問をするタイミング	マナー講座Ⅱ (社会福祉学科の学生が担当) ④寝る前の過ごし方 ⑤出勤の際に ⑥身だしなみを整える
マナー講座Ⅰ (社会福祉学科の学生が担当) ①挨拶と報告をする時は ②作業中の指示 ③質問をするタイミング	マナー講座Ⅱ (社会福祉学科の学生が担当) ④寝る前の過ごし方 ⑤出勤の際に ⑥身だしなみを整える		
模擬作業	<table border="1"> <tr> <td> 模擬作業Ⅰ 「事務作業(実習日誌作成)」 (支援センター職員が担当) ①書類を順番通りに取って「セット」する ②セットされたものを「封入」 ③封筒へ「ラベル貼り」 </td> <td> 模擬作業Ⅱ 「図書館作業」 (附属図書館職員が担当) ①抜き取り作業 ②返却作業 </td> </tr> </table>	模擬作業Ⅰ 「事務作業(実習日誌作成)」 (支援センター職員が担当) ①書類を順番通りに取って「セット」する ②セットされたものを「封入」 ③封筒へ「ラベル貼り」	模擬作業Ⅱ 「図書館作業」 (附属図書館職員が担当) ①抜き取り作業 ②返却作業
模擬作業Ⅰ 「事務作業(実習日誌作成)」 (支援センター職員が担当) ①書類を順番通りに取って「セット」する ②セットされたものを「封入」 ③封筒へ「ラベル貼り」	模擬作業Ⅱ 「図書館作業」 (附属図書館職員が担当) ①抜き取り作業 ②返却作業		

内容に連動して、テーマは、「挨拶と報告をする時のやりとり」、「作業中の指示の受け止め」、「質問をするタイミング」の軽演劇を行った。

②マナー講座Ⅱ：「基本的生活習慣の大切さ」の講義内容に連動して、テーマは「寝る前の過ごし方」、「出勤前の準備の大切さ」、「身だしなみの大切さ」の軽演劇を行った。



写真2 マナー講座

3) グループワーク：支援センター職員がファシリテーター役となり、2グループに分かれて行った。参加者と学生サポーターが並んで座り、発言に困った時等に支援を行った。内容は、講義やマナー講座での参加者の学びや気付きを取り上げ、参加者同士で共有した。

4) 模擬作業：講義とマナー講座で得た知識、グループワークを通して押さえたポイントを実践するために、事務作業と図書館作業の2つの作業体験を実施した。

①事務作業：講義をした会場を作業場のようにレイアウトした。事務作業は3つの工程から構成されており指示書に従って行う。同大学から発送する書類を順番通りに取って「セット」する。セットされたものを封筒に入れる「封入作業」、封入した封筒に宛名ラベルを貼る「ラベル貼り」を実施した。



写真3 事務作業

②図書館作業：大学附属図書館を会場とし、指示書に従って、本棚から書籍を取り出してくる「抜き取り作業」と、請求番号等を元に書籍を本棚に戻す「返却作業」を実施した。

この模擬作業にあたっては、参加者が自立して作業ができるよう、作業の手順書や、学生スタッフの実演、見本(完成品)、困った時に質問できる学生サポーター等を活用してもらいながら実施した。



写真3 図書館作業(返却作業)

6) プログラム実施後：支援センターが参加者の所属校を訪問(事後訪問)し、保護者、担任、特別支援教育コーディネーター、相談室教諭等に可能な範囲で同席してもらい、参加者にプログラムの感想等を聞き取った。また、プログラムを通して得られた今後の就労準備に関して、家庭生活や学校生活(学外実習等)で取り組みそうな点について提案した。後日、総括としてスタッフ(学生除く)で反省会を実施した。

3. 実践の具体的な内容

1) 講義：職場で働くうえで必要となる知識に関する講義を2つのテーマで実施した。パワーポイントを用いて各講義は約30分程度。

①「働く上で大切なコミュニケーション」：学校と職場の違いを整理すると共に、挨拶について、報告・連絡・相談(ホウレンソウ)の大切さについての講義を行った。講師はキャリアコンサルタント資格を持つ大学職員。

②「基本的生活習慣の大切さ」：学校と職場の違いを整理すると共に、朝食の必要性、睡眠時間の確保、朝の準備や段取り、身だしなみについて講義を行った。講師は看護師資格を持つ大学教員。



写真1 講義

2) マナー講座：講義内容をより具体的な場面で示すため、学生が軽演劇を行う。一つの講義に対して各3つの場面で構成している。一つの場面を見終えた直後に、そのテーマについてワークシートを用いて整理した。

①マナー講座Ⅰ：「働く上で大切なコミュニケーション」の講義



写真4 図書館作業（報告）

5) グループワーク：模擬作業実施後に学生サポーターから参加者が意識して取り組んでいた点や頑張っていた点を報告してもらい、参加者が作業をするうえで役立ったと感じたツールや環境を振り返ることで、自分に合ったサポートを知る手がかりとした。また、参加者が気づいていないことについても学生サポーターやファシリテーターからの意見で理解できるようにした。そして、最後に講義等を含めた1日の振り返り、2日目には2日間のプログラムを終えての感想等についても共有した。学生サポーターも頑張っていた時の様子等について参加者に伝えた。



写真6 グループワーク

6) 修了式：2日間のプログラムを終えて、学生サポーターから担当している参加者へ修了証書を手渡した。その後、参加者から感想や学生サポーターへのお礼等の言葉と学生サポーターから頑張っていたこと等についての言葉を贈った。

4. 結果

1) 参加者

講義やマナー講座を通して参加者からは、「報告・連絡・相談は、どのようなタイミングで、どのような言葉で伝えれば良いかが具体的に分かった」、「身だしなみは出来ているが、睡眠時間の確保や朝の準備が出来ていないので、気を付けたいです」、「先生に言われてきたことは、“命令”や“注意”ではなく、自分のためを思って言っている“助言”だったことに初めて気付いた」等の感想がアンケートに記載されていた。参加者にとって、新たな知識の習得や具体的な使い方を学ぶ機会となっただけではなく、自分が今後整えていくべきことへの気付きや、相手の立場に気付く機会にもつながった。

事後訪問時の参加者の聞き取りからは、「これまで“質問”が苦手であったが、模擬作業で“質問”の練習をしたことで、学校でも先生に質問をすることが出来た」との意見もあった。本プログラムは、講義やマナー講座で知識の学びや気付きを得てもらい、その直後に模擬作業の中で実践を行い、最後にそれらを振り返ることで自己理解につなげる、「学び—実践—振り返り」をねらった構成を取っている。この過程を通して、参加者の気付きにつながり、日常生活における般化にもつながっていったと考える。また、「自分は将来仕事なんて出来ないと思って

いたが、やるべきことをきちんと教えてもらうことで、スムーズに作業が出来て良かった」という参加者の感想からは、本プログラムが、成功体験を通して、就労イメージの拡大や自分にとって必要なサポートや環境を知る手がかりにもなり、今後の就労準備を考えるきっかけになったと思われる。

2) 所属校

所属校の特別支援教育コーディネーターや相談室教諭等、学校内における発達障害のある生徒への支援を中心的に担うキーパーソンと事前訪問、事後訪問、プログラムの見学等を通して関わることで、学校内のニーズの掘り起こしにつながったり、発達障害のある生徒に対する就労準備の必要性や、就労準備に大切な視点を共有できた。実際に、所属校の教諭からは、発達障害のある生徒に対して、通常のキャリア教育以外にどういったポイントを伝えていく必要があるのか、発達障害のある学生が理解しやすい伝え方（学び—実践—振り返りの過程）を学ぶことが出来たとの意見が聞かれた。

3) 学生

障害者福祉分野での就労を目指す学生にとっては、発達障害のある人との関わりを実際に体験できる機会、発達障害の特性理解や対応方法を実際に学ぶ機会になった。特にサポーターを担った学生からは、「実際に発達障害のある人と関わる中で、参加者自身に合ったサポートや環境を整えることで力を発揮していく姿を見ることが出来た」、「大学の講義等で得た知識をどのように実践に活かしていくかの体験となった」、「将来（就労）への見通しを持ちながら今必要とされること（学ぶべきこと）は何かを考える視点を学べた」等の意見が出た。

4) まとめ

本プログラムは、普通高校に通う発達障害のある人の就労準備に取り組む資源創出に留まらず、所属校における発達障害ニーズの掘り起こしや就労準備の視点の共有にまで効果が及んだ。また、人材育成機関である大学が、支援センターと協働することで、大学側の強み（教職員の専門性、地域に密着した学内施設の利用、学生の参加）を活かし、地域における発達障害ニーズに応じたプログラムを実施することができ、地域貢献の機会にもつながったと考える。

5. 今後の展開

平成25年度から4年間で東北エリアの一般の高等学校に在籍している高校生を対象に実施してきた。地域の6つの高等学校から32名の参加者が本プログラムを体験した。このプログラムに参加後の高校生活、進路選択に関して一定の効果があったと考える。しかし、参加者はこのプログラムを必要としている高校生の一部であり、顕在的、潜在的に多くの高校生に対して実施していくことが必要であると考える。現在は大学と支援センターが主体となって実施しているが、今後は高校単位で就労準備教育を実施していけることが望まれる。

こうした、背景から平成27年度より大学、支援センター、参加している高等学校の教育相談担当や進路指導担当教員等の三者で今後の企画会議を実施している。その結果として、平成27年度は、次年度に向け「参加する高校生が所属している高校教員の見学参加を増やし、プログラム内容を理解するとともに、高校での就労準備教育につなげられるようにする」という目標となった。その結果、第1クールはA高校3名、B高校1名、C高校2名の見学参加があり、第2クールはA高校2名、C高校3名の見学参加があった。また、平成28年度は、次年度に向け「一般高校に在籍する発達障害のある生徒の個別ニーズに応じて、高校単位で就労準備教育を実施するための後押しを考える」という目標を得られた。

この流れの中で、本年度は高等学校1校2年生を対象に、「出

前講座～働くことを知る・学ぶ」を行った。講義Ⅰ・Ⅱ及びマナー講座Ⅰ・Ⅱ終了後学生がファシリテーターとなり、グループワークを行うという内容として試行的に行った。終了後の振り返りでも、高校生への効果を確認でき、今後も日程が合えば、こうした形も実施していくことになった。

今後、オープン・カレッジと出前講座両方のプログラムを実践していくとともに、必要としている高校生に就労準備教育として高等学校教育に活用できるよう、内容を吟味し働きかけていくことを継続したい。

Ⅲ. オープン・カレッジ “きんちやい みまさかれっじ”

近年、高等学校卒業後の大学・短大進学率が50%を超えている。また、生涯学習、生涯教育等多くの人が市民講座や老人大学、カルチャーセンターなどで学ぶ機会を得ている。しかし、知的障害のある人の場合は特別支援学校卒業後、大学等の高等教育を受ける機会がないのが現状である。学習機会の少ない知的障害者を大学に招き、講義を受けてもらうという取り組みのことをオープン・カレッジという。オープン・カレッジは1995年、東京学芸大学において、大学教員や付属養護学校(現在は特別支援学校)、多摩地域の養護学校教員の教員などで構成される「養護学校進路指導研究会」が、特別支援学校を卒業した知的障害者を対象に大学公開講座「自分を知り、社会を学ぶ」を開講したのが始まりである¹⁾1998年に大阪府立大学安藤研究室²⁾がオープン・カレッジとして活動を始め、活動に賛同した大学関係者を中心に広がった。

本学での取り組みは2014年度から当時の薬師寺研究室の3年生のゼミ生が、研究、先行事例の視察等の準備を行い、2015年から実践している。この取り組みの目的は「学習の機会の少ない方を大学に招き、受講してもらうことで、得た知識や経験を基に、よりいきいきとして生活につなげてもらいたい」である。今年度から開催を前期・後期で2日間、1日2講座で実施することとした。

1. 方法

- ①企画：薬師寺研究室ゼミ学生（3年生8名・4年生7名）及び筆者
- ②実践者：薬師寺研究室ゼミ学生（3年生・4年生）及び筆者全体の運営：薬師寺ゼミ学生（3・4年生）
- ③対象：18歳以上の知的障害のある人
- ④倫理的配慮：記録等の写真撮影、HP等への掲載について、参加者に説明を行い、書面にて同意を得た。

2. 実践内容

今年度から、前期1日（2講座）、後期1日（2講座）で実施した。参加者は女性2名、男性1名。

①前期

2017年10月14日（土）

午前：保健衛生（口腔ケアについて）

講師：岡山県歯科衛生士会

午後：スポーツ実技（ストレッチ）

講師：Globe

②後期

2018年3月3日（土）

午前：経済学（お金について）

講師：一般財団法人 ゆうちょ財団

午後：スポーツ実技（フラダンス）

講師：美作大学 小山京子氏



写真6 保健衛生（口腔ケア）



写真7 スポーツ実技（ストレッチ）



写真8 経済学（お金について）



写真9 スポーツ実技（フラダンス）

3. 結果

講義内容は、参加者が取り組みやすいよう、講義と演習を合わせて実施できるよう工夫した。また、知的障害のある人の生活に活かせるようなテーマとした。参加者アンケートの結果は3名とも、講義の内容に興味を持って、楽しく取り組めたと回答していた。また、今後受講したい内容についても具体的に答えてくれており、今後のオープン・カレッジに期待してくれていた。また、講師へのアンケートの結果は、「事前シートがあったので、想定しやすかった」、「学生サポーターが入ってくれたので、困りごとはなかった」、「受講生がとても前向きに受講してくれた」等であった。学生の事前の準備や、講師とのやり取りが十分できており、当日がスムーズに進行できたようだった。また、参加者が楽しみながら前向きに受講しており、このことが、ゼミ学生たちのモチベーションにもつながっていると考えられる。

今年度はゼミ学生が他の取り組み等で時間が作れなかったことや、負担を考えこれまでの半分の内容とした。しかし、参加者やその家族からのニーズもあり、学生が無理のないように続けていけるよう工夫していきたい。

2015年度に始まった活動であるが、その当時の学生の想いや知的障害のある人の想いを受け、学生が前向きに取り組んでくれている。この経験は、実習や就職等の将来に直接影響があることであり、かつ学生の間力の形成の一助となっていると実感する。今後も学生の成長と負担等について考慮しながら、地域のニーズに応えられるよう、継続に向け努めていきたい。

（文献）

1) 建部久美子(編)・安原佳子(2001)：知的障害者と生涯教育の保障-オープン・カレッジの成立と展開-。明石書店。

2) 杉本正、兼松美幸(2010)「実践報告『オープン・カレッジの展開』」, 帝塚山大学心理福祉学部紀要。